

9月15日(土曜日) 研究発表

“Easter, 1916”の語りの効果— Text World Theory を用いた分析の試み

伊東 裕起

いかにして文学作品の持つ詩的効果を解き明かすことができるか。この問題を解き明かすため、1980年代以降、George LakoffのConceptual Metaphor理論など、認知言語学の理論を用いて詩を分析する試みが盛んになりつつある。しかし、認知言語学はその性質上、言語中心・テキスト中心の分析に傾きやすく、作品の背景をどうしても無視してしまうという傾向にあった。George LakoffもMark Turnerとの共著(1989)でYeatsの作品の分析を試みているが、残念ながらその作品の背景にはほとんど言及がなされていない。

そのため、認知言語学的分析は豊かな背景を持つ文学作品の分析にはあまり向かないとされてきた。しかし、その欠点を補い得る理論として、Text World Theory というものがPaul Werth (1999)によって提唱され、Joanna Gavins (2007)などによって発展させられている。この理論は談話分析から発展してきたもので、テキストを読むということ、テキストを媒介にした作者と読者の間の談話、いわば一種のコミュニケーションと見做すという特徴がある。作者はテキストの言語を通して読者に少しずつ情報を与え、読者はその情報を元にtext worldを心の中に作り上げていく。そのように考えるのがこの理論である。

Yeatsの作品は詩的言語の美しさと共に、その背後に豊かな社会的な背景を持っている。Yeatsの作品を分析する際に、このText World Theoryはどれだけ有効なのだろうか。私は本発表において、この理論を援用しながらイェイツの作品の中でも最も社会的な詩のひとつ、“Easter, 1916”についての分析を試みる。

イェイツによる英雄創造

中村 麻衣子

19世紀末、ロンドンでは銅像建設が流行していた。これまでは王族が中心であった銅像に、クリミア戦争をはじめとした対外戦争の英雄である軍人や政治家が加わったのである。さらにナショナル・ポートレート・ギャラリーの開館により、肖像画や銅像といった、目に見えるかたちで偉人のコメモレイションが流通していた。こうしたイギリスに生きたイェイツはどう対応していたのだろうか。現在のダブリンは通りや駅の名にも建国の英雄たちが刻まれているが、世紀転換期のアイルランドは未だ植民地で、必ずしも戦争での勝利という、コメモレイションを行う根拠がない。しかし独立運動が激化するにつれ、イェイツはその詩の中に後の建国の英雄たちを書き記している。勝利とい

うラベルのない人物は、イエイツによってアイルランド土着の、神話に支えられて歴史の中にその位置を獲得することになる。本発表では『マイケル・ロバーツと踊り子』中の詩をコメモレイションの詩として読み、さらにイエイツ自身で創った神話体系やモザイクへの憧憬など、時を越えた存在へ自らを取り込もうとする動きからも、英雄創造を通して新たなアイルランド史を作り上げているイエイツを明らかにする。

イエイツ：「存在の統一」から<存在の位相>へ

小堀 隆司

個人の生にあっても歴史にあっても、完璧な理想や完全な調和の保たれた状態を指してイエイツは「存在の統一」と命名するが、それは凡そ人間の生の介在できない地平として位置づけられている月の「第十五相」において実現される。ということは、その理想的な調和の世界は実際には実現不可能であり、理想と現実、調和と混沌の二分化は決してそこに活路を見出すことはできない。過去の時代や場所や人物に「存在の統一」を見出すイエイツは、自身の生きる現実にあっては其の不可能性を自ら明言しながらも、生涯「存在の統一」を追い求めた詩人であるといえよう。その実現はともかく、では、なぜそれほどまでに追求しつづけたのか。

不可能なるものに辿り着こうとする過程のなかで、「存在の統一」に多少の変容が起ったのではないかと考えられるが、その機縁はイエイツが「ダイモン」や「仮面」や「イメージ」などに言及している処に窺える。たとえばイエイツは「不可能ではないが、最も困難な行為」を「ダイモン」が人間に仕向けると「人間の霊魂」で述べている。この言説は詩「月の諸相」にも見られるが、彼のよく使う表現である。こうした「行為」が「存在の統一」を衝き動かす可能性を孕んでいるとしたならば、僅かに変容した「存在の統一」はその射程を遥かに拡げていくにちがいない。それは「仮面」や「幻想」や「イメージ」と相俟って様々な作品に浸透しているかに思われる。

具体的に作品にあたって行く際、変容を受けた「存在の統一」は「存在の統一」そのものから飛躍して<存在の位相>として読まれていく可能性を秘めている。このことを前提にまずは「学童たちのなかで」、「万霊節の夜」、その他何篇か取り挙げて考察するが、<存在>への志向は絶対的な「存在の統一」そのものを目指しこそすれ、決してそうした窮極だけを射程に入れているわけではない。あるがままに<在る>という生から、あるべきものとして<在る>という生に至るまで、その様々な生の姿を<存在の位相>として射程に入れるのである。

生涯追い求めた実現不可能な「存在の統一」のこうした様々な変容の軌跡をイエイツの作品に求めてみたい。

9月15日(土曜日) ワークショップ

“Lapis Lazuli”を読む

司会・構成：長谷川弘基

発言者：渡辺久義・大野光子・虎岩直子

長谷川 弘基

イェイツ晩年の作品である“Lapis Lazuli”を取り上げ、「この詩を『良い詩』だと感じる理由・根拠は何なのか?」、「この詩の『良さ』は（仮にも『良さ』があるとしたなら）いったい何に起因するのか?」ということを共通の課題として念頭に置きつつ、3人の発表者に自らの「読み」を紹介していただく。

最初に、詩の個々の言葉が特定の意味ないしは効果を持つにいたるプロセスやメカニズムが顕わになることが期待される。次に、「私にとっての『良さ』は、他者にとっても『良さ』となりえるのか?」についても考えてみたい。一人の読者の主観的反応がどのようにして客観性を獲得するのか、換言すれば、「好きな詩」はいったいどこで「良い詩」となるのか? このような問いが、すぐにでも哲学的な問いに変貌し、その結果、「語り得ぬもの」になることは十分に予想できる。しかし、語り得ぬものに対しては沈黙することが賢明であるとしても、語り得るところまでは語り合うこと、それを試みたい。

そのためにも、3人の発表者には、それぞれに自由な「読み」を展開することを要請した。以下は、3人の発表者から受け取った7月現在での「展望」である。図らずも三者三様の切り口が提示された。せつかくの個々の「読み」が上質なブレンドにならないようなことがあれば、全ての責は拙い構成・司会に帰するであろう。

渡辺 久義

軸になっている gay という語を中心にして、この詩がどう発展し高められ、どういう境地に達するかを考えてみたい。この詩は悲劇論でもあり芸術論でもあり、悲劇や芸術や詩をもつ人間の偉大さ、あるいは芸術信仰がテーマだとも言える。いくつか頭に浮かぶ私の論点をキーワード的に列挙するなら—私情の克服、人間の尊厳（品位）、能動的受苦、Absent thee from felicity awhile...

（ハムレットのせりふ）、“On His Blindness”（ミルトン）など。

「加齢は詩の読みを変えるか？」

大野 光子

イエイツがこの詩を書いたのは71歳の夏(1936年7月)。二つの世界大戦に挟まれたこの時代、ムッソリーニとヒットラーの台頭によってヨーロッパ全体に不穏な空気が立ちこめ、英国でも人々がかまびすしく危機対応策を論じ合った時期である。他方、高齢となったイエイツ自身も、死の影を自覚しつつ詩人生命の最後の燃焼に打ちこんでいた。そうした外的内的要因を取り込んで書かれたこの「ラピス・ラズリ」を、長谷川氏の要請で久し振りに読み、くりかえし再読し、改めて心に疑問が湧き上がった。詩の読みは、加齢とともに変化するのか？

この疑問は、最終行 **'Their ancient, glittering eyes, are gay.'**に至るにおよび、なぜか熱い感情が私の胸にこみ上げて来たことに由来している。年齢とともに読み自体が深まるのか、あるいは独善に陥るのかは定かではないが、その自然な感情に驚くとともに、それが自分自身の加齢のなせる技ではないかと思うに到った。これまでこの詩を優れた詩として読んだことはあったが、このような感動とも呼べる実感を持って読んだ記憶はなかったのである。

古希祝いの見事な贈物によって自らの長寿を実感した詩人が、想念を徹底的に「モノ」に託したこの詩には、イエイツの芸術家としての体験がこめられている。それを読む者にとっても、詩の解説を自身の経験の蓄積が助ける、と考えることはできるのではないか。

そこで、本報告では、イエイツが具体的にはどのようなモノに思念を託し、どのような言葉の仕掛けによって、それを圧倒的な最終行に向かって熟成させていくのかを、解析していくことを目指したい。まずは、**'I have heard that hysterical women say'**の「伝聞」から、イエイツの「モノの扱い」を分析する作業を始めたい。

虎岩 直子

'Lapis Lazuli'を読むにあたってチェアから与えられた方向性は、「良い作品」であるとしたなら(アンソロジー・ピースだし、'Lapis Lazuli'は「良い作品」なのだ)、それはなぜか、ということが見えてくるように読んでみせる、ということである。それで、「良い作品」とは何か、ということをしばらく考えている。難しい、ので、並行的な経験から類推してみる。絵画でいえば、美術館を歩き慣れた観客をいつもしばらく立ち止まらせる力を持つ作品だろう、と考える。美術館に展示されているからには、すでに「権威」を与えられているわけだが、それは既に名声を博していた Yeats の 'Lapis Lazuli' でも同じ条件なので、よしとしておく。

何故いつも、たとえばスーラの『アニエールの水浴』の前で、わたしは立ち止まるのだろうか。川辺の人々のそれぞれのポーズとそのコンビネーションが面白い、当時の水浴姿が興味深い、カンバスの間近に立ってスーラ独特の色彩分割の手法を確認したい、「アニエール」というわたしの知らない場所の名前にひかれる、様々あるが、見る度にそ

の前の「感動」の印象を確認するとともに、新しい謎があり発見があるのだ。

基本的な命題に著名な批評家の言葉を引用するのは気が引けるが、「良い作品」とは Declan Kiberd が「古典」の定義として言っているようなものであろう。

For me a classic is like a great poem, 'news that stays news.' It is in fact the sort of book that everybody enjoys reading and nobody wants to come to an end.

'Lapis Lazuli'は'news that stay news'のような、立ち止まらせる力がある作品なのだ。

別の言い方をすれば「良い作品」には何度読んでも「謎」がある。

わたしが最初にこの作品を読んだのは20代初めで、'Sailing to Byzantium'との比較分析という課題を与えられて、そのときは立ち止まらざるを得なかったのであるが、まず'Lapis Lazuli'というタイトル自体、mesmericな不思議な音を持つ語で謎めかしい。それにしても、何故この詩のタイトルは'Lapis Lazuli'であり'Chinamen Admiring Plum Blossoms'とか'On Gaiety of Art'ではないのか。おそらくそれはこの詩の重要なテーマのひとつと関係がある。様々な謎を次回読解のために残しながら、虎岩の読解ではこの詩はいつも、'Lapis Lazuli'という半貴石を読み取る詩人とYeatsの'Lapis Lazuli'を読み取っていく読者が'gay'という心持ちで一緒になる瞬間を目指していく。

9月16日(日曜日) 研究発表

シェイマス・ヒーニーの第1詩集「Death of a Naturalist」における
コンテンツ・アナリシス・アプローチ —名詞と形容詞に着目して—

齊藤 徳彦

1. 目的

詩は言葉の芸術であり、言葉は意味と音を持った記号として言語表現の中で働く。そしてその表現には常にその詩が書かれた土地と(空間)と歴史(時間)が支配しており、その中で詩人がどのように自己あるいは、自己が存在する世界を把握(表現)しているかが伺われる。今回は『語・語彙』という視点からヒーニーの詩の特徴を調べる目的で第1詩集「ある自然児の死」(“Death of a Naturalist”)¹⁾を対象として名詞と形容詞の分析を試みた。

2. 研究方法

ヒーニーの第1詩集「ある自然児の死」の全詩(34詩)のタイトル、本文の語句をエクセル(Microsoft Office Excel 2003)を使って名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞に分類し入力した。今回は、詩の内容的な特徴を調べるという目的で名詞と形容詞のみの数をカウントし、その統計表を作成しその特徴を分析した。分析方法としては内容分析法 Content Analysis²⁾を利用した。

3. 結果および考察

各詩の本文中に含まれる名詞の総数は1409個であった。名詞のカテゴリごとの数を見ると、人間に関係する分野(35.1%)、生活・社会に関係する分野(22.7%)、自然環境に関係する分野(15.2%)の順で多かった。出現頻度でみた名詞語句の数を見ると、出現頻度の多い順に、15回の eye、11回の day、10回の hand, water、9回の sod と続いた。また各カテゴリの特徴的な名詞を出現率上位から抜粋した。出現頻度別にみた名詞語句から、出現頻度の高い上位6位までの語句(名詞)についてのヒーニーの詩の中での使われ方を検討したので報告する。

4. まとめ

詩を全体として捉えるだけでなく今回のように詩の中で使われる語句一つ一つに着目して詩を読み直す作業は、詩人の言葉に対する感覚を確認する上で大変役立ったといえる。

文献

1) Seamus Heaney 1966 Death of a Naturalist faber and faber

2) バーナード・ベレルソン 内容分析 (稲葉三千男・金圭煥訳 1957 みすず書房)

The Player Queen における仮面とその意味

山本 佳寿

The Player Queen は1919年、ロンドンの King's Hall において初演された戯曲である。この戯曲がアビー座で上演された折には、観劇後に“strange story baffles me”、“the audience went to be mystified” などといった感想があがったことが記録されている。プロットの中には不可解な部分が多かったため、それらが批評家たちからはプロットの一貫性の無さとしてしばしば指摘されてきた。この戯曲の構想は、1908年ごろから練られていたにもかかわらず、完成させ、上演するに至るまでには10年の空白があり、イェイツは初期の構想の *tragedy* から *farce* へとこの戯曲のかたちを大幅に変更させることによって完成させた。戯曲発表時にイェイツは “It is the only play of mine which has not its scene laid in Ireland.” という言葉を残しているが、これはこの戯曲がイェイツ自身のために書き残しておいたと考えられるのである。

劇中それらを端的にあらわしているのではないかと推察されるシーンは、押し寄せてくる民衆を恐れた女王が、王座を捨てて逃げ去り、女王と入れ替わりに登場した、旅役者の女優が女王の仮面をつけて急場をしのぐ場面である。身代わりに立った仮面の贗女王は民衆の攻撃を受けることはなく拍手と歓声をもって民衆に迎えられる。贗女王は仮面をつけたままの姿で女王として生きてゆくことを選ぶという結末はイェイツ自身のことを重ねあわせてみれば、不可解ではない。プロットの全体も至極自然な告白録的な意味合いを持つ戯曲であると考えられるのである。

身体の昇華 — 『天からの叫び』(ヴィンセント・ウッズ) と 『デアドラ』(W. B. イェイツ)

坂内 太

アイルランド文芸復興期以降、繰り返し生産されたデアドラ伝説の演劇的バリエーションは、オリヴィエ・ピーの前衛的な舞台によって、2005年のアビー劇場で再びその潜在力を発揮した。ヴィンセント・ウッズ脚本によるこの舞台は、運命を可視化する大車輪や仮面のようなメーキャップで、W. B. イェイツの種々の作品のエコーを響かせていた。その一方、予言によって道行きを確定されているデアドラが当の予言と対峙する主体的な在り方には、アイルランドにおける女性表象の現代的な一傾向が認められる。しかし、この主体性はすでに別の次元で、イェイツの『デアドラ』のテキストに埋め込まれているものではないだろうか。

本発表では二つの作品を取り上げてイェイツとウッズによる女性表象の対比を試みたい。

9月16日(日曜日) シンポジウム

イェイツと海

司会・構成：松村賢一

発言者：海老澤邦江・石川隆士・伊里松俊・萩原眞一

松村 賢一

『アシーンの放浪、その他の詩』(*The Wanderings of Oisín and Other Poems*, 1889) はイェイツの最初の詩集であるが、「アシーンの放浪」は詩人イェイツのイニシエーションとして重要な意味をもち、アイルランド文芸復興運動の起程となった物語詩である。文学的手法の発展にもなって、主題もその変容の途をたどるかのように見えるが、じつは「アシーンの放浪」に内在する二元性、矛盾、二律背反の構想は、「ビザンチウム」(“Byzantium”)の彼方の「瑠璃」(“Lapis Lazuli”)においても反復しているのではないか。そうした中で、海はイェイツの詩的精神にどのように関わり、作用したのであろうか。

「アシーンの放浪」は海底の生者の島、勝利の島、忘却の島をめぐるが、「その他の詩」の内12篇が詩集『十字路』(*The Crossways*, 1889)に収められ、なかでも「さらわれた子」(“The Stolen Child”)、「老漁夫のもの思い」(“The Meditation of the Old Fisherman”)、「湖の小島へ」(“To an Isle in the Water”)など、初期から水、滝、湖、岸边といった表象と深く関わっている。

異界(the Otherworld)への航海をはじめ、アイルランドの伝承文学はまさに海によって生まれてきたともいえる。イェイツが“Celtic Beliefs About the Soul”と題して*The Voyage of Bran* (Kuno Meyerの英訳、David Nuttの論考)の書評を*The Bookman*誌に書いたのは1898年のことである。イェイツはこの中世の航海文学の伝統に連なりつつ、海をひとつの想像力の核心とし、その文法を縦横に繰り出してビザンチウム詩篇(Byzantine poems)や「彫像」(“The Statues”)を創造した。このシンポジウムでは4人の俊英が独自の視点から「イェイツと海」をめぐる、初期、中期、後期の詩にわたって発言する予定である。

ケルトの薄明期のトポスとしての水 — 泉・湖・海

海老澤 邦江

ギリシア神話のスティクス川やミシェル・フーコーの『狂気の歴史』の「阿呆船」に窺えるように、人間の「水」に対する思念のひとつは、現世と来世（此岸と彼岸、俗と聖）、現象世界と超常現象世界、常人と常ならざる者（正気と狂気）を隔てる結節点である。イェイツの初期の作品に描かれる「水」は、戦いに敗れ追放されたダナーン族が逃れ住んだといわれる土地への結節点として描かれている。

その結節点を前にして、その先にある現世を超越する異次元空間としての「異界」、あるいは、秩序と混沌・生と死・理性と情動が共存するという意味において「至高の地」に憧憬を抱きつつも到達が果たされない心情が“The Madness of King Goll”, “The Stolen Child”, “To an Isle in the Water”, “Fergus and the Druid”, “The Lake Isle of Innisfree”, “The White Birds”, “The Man Who Dreamed of Faeryland”などに強く打ち出されている。これらの作品において、「水」は、「彼方の地」と隔てる境界線としての意味を持っているにすぎない。また、3つのトポスに共通しているのは、水の神秘的な「静」のイメージだが、「海」をモチーフに持つことで、水の破壊的かつ不条理な「動」と「混沌」のイメージを加わる。“Cuchulain’s Fight with the Sea”, “The Shadowy Water”, “The Wanderings of Oisín”には、後に多様な意味とイメージに増幅される「海」への展開が予感される。

留意したいもうひとつは、「水」のイメージの広がり、は、「泉」→「湖」→「海」であり、このベクトル方向は可逆性を持っている。つまり、「水」の世界の彼方には、「至高の地」が存在する意味においては、どのトポスにおいても同質の意味がある。「海」をマクロコスモスと考えるならば、「湖」と「泉」は、そのミクロコスモスを形成していると考えられるのではないだろうか。

初期の作品を中心にして、トポスとしての「水」が「此岸」と「彼岸」との結節点としてどのように描かれているのか、また、その3者が、可逆的な方向性を指し示す関係性に結ばれているかを明らかにし、イェイツの以降の作品に展開・増幅される「海」のイメージの端緒を検討したい。

想像力の汀：“The Collar Bone of a Hare”を基点として

石川 隆士

海は比類なき親密性で生命が交感する場であり、豊穡なる想像力の源泉である。しかし一方で、生身の人間の介入を許さない拒絶の場でもある。本発表では、この両義的な海の役割が、Yeatsの想像力にどのように構造的に関わっているのかを論じたい。

ジュール・ミシュレが、その非凡なる直観によって地球の表面における大陸と海のネガとポジを逆転させて見せたとき、海は均一なるものをつないだ輪郭を描き出した。同じミシュレが、インド・ヨーロッパ語に遡る古来から、海が人の侵入を阻む深淵として

畏怖されていたことも伝えている。つまり、海はまずもって断絶を意味していた。そのとおりユリシーズにとっての海は旅を完結するために乗り越えるべき障害であって、それを乗り越えて初めて接合が達成されるのである。もちろん大陸と大陸とをつないでいるのは海に違いはないが、もしそれが容易に横断できる地面であったら、人は「つなぐ」あるいは「つながれる」ことを強く意識したであろうか。

連続と断絶はこのように経験において相補的な関係を持つが、本論が焦点としているのは断絶の方である。想像とは我々の経験的現実を思惟的空間に接合させてゆく行為ともいえる。単に現出せしめられた空間に埋没するだけでも十分に価値のある行為ではあるが、そこにその空間を欲望する視点が与えられれば、その価値はさらに深まるのではないだろうか。その視点の導入はモノリスティックな想像空間に断絶をもたらす。

この複層的な想像の現場をイェイツの中期の小品である“The Collar Bone of a Hare”を基点として、初期の作品および、やや後期の作品と比較しながら分析したい。特に汀という視覚的にも明確な断絶を描き出す海は、対象としてのみならず想像行為を体現するトポスとしても大きな意味を持っており、同時に対立するものの照応関係を重視する“antithetical”を標榜する彼の後期の思想との関連も考察に値すると考える。

イェイツのアフロディテ —アイルランド、愛、革命—

伊里 松俊

イェイツは詩「三つの運動」(“Three Movements”)で「シェイクスピア流派の魚は陸地から遠く離れて、海を泳いだ。ロマン派の魚は手の近くで、網の中を泳いだ。今岸边で喘ぎ、横たわるそれらの魚は一体何だ」とうたっている。この詩は、ルネサンス期までは自由闊達であり、ロマン主義時代には制限を受けながらも羽ばたいていた詩人の想像力を思い描き、20世紀詩人のそれが瀕死の状態にあることを嘆いたものである。彼の詩は、初期の「幸福な牧人の歌」(“The Song of the Happy Shepherd”)を出発点として、詩精神の枯渇を、古代世界への回帰により、解決しようとする作業であった。

イェイツの詩に現れた「海」のイメージを考察する時、われわれはそれが古代ギリシアやそれと等しく「詩」に満ちた古代アイルランド世界に結び付くのを知る。彼の想像力の泉は想像上のギリシアやアイルランドの古代の海へと繋がっており、彼の詩はある種の水の循環運動を示しているといえる。

本発表の目的は、1910年代の詩、特に「ある政治投獄者」(“On a Political Prisoner”)や「娘への祈り」(“A Prayer for My Daughter”)に見る「海」をキー・イメージとして取り上げ、国民文学・国民文化構築のための「アイルランド」神話化、アイルランド革命、理想の女性像のテーマを考察することにより、イェイツの詩論、歴史観、政治主張を明らかにすることである。またこの試みは詩人がロマン派詩人たちや「神秘主義」(occultism)から受けた影響をも明らかにすることになる。

イェイツと地中海 — “The Statues”を中心に —

萩原 真一

後期イェイツの3つの詩作品“Byzantium” “The Statues” “News for the Delphic Oracle”を対象にしながら、特に“The Statues”における海のイメージについて考察することを目的とする。これらの詩で言及される海は主にエーゲ海であると推察されるが、周知のように、エーゲ海は別名 the Archipelago と呼ばれる。ギリシャ語原義で「始原の海」を意味する一般名詞 archipelago は、「多島海／群島」という二義をもつ。エーゲ海は多くの島が浮かぶ海であると共に、海に浮かぶ多くの島の連なりというわけだ。このエーゲ海は、人と人とを隔てる障壁の役割をするだけではなく、人と人とを結ぶ柔軟な交通路の役割も果たす。エーゲ海に臨むギリシャは、ヨーロッパとアジアの境界に位置し、両者の文明が出会い、衝突する「半アジア的」“half Asiatic”な場であった。この“半アジア的”なギリシャという地理的環境／文化的環境は、随想 *On the Boiler* の中で描かれる相対立するものの交錯的な構図、すなわち「アジア的海」“Asiatic sea”を背景とするドーリア式彫像や、詩人が保養地ラパロ周辺の地中海の浜辺で見た、水上スキーに興じるスウェーデンの女優—“a Swedish actress riding the foam upon a plank”—に通底するといえるのではなかろうか。以上、シンポジウムでは「交通路」としての「始原の海」たる地中海という視座から、上記3つの詩作品における海の表象にアプローチしたい。なお、海に関連する表象として、アイルランド伝来の彼岸幻想とギリシャ・ローマ以来の夢幻の理想郷への憧憬という、ヨーロッパの2つの長い他界観の系譜が交差するトポスとしての島、肉体を離脱したばかりの魂を彼岸へ運ぶ、靈魂の運搬者としての海豚についても触れる予定である。